

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 21 年 5 月 22 日現在

研究種目：基盤研究（B）
研究期間：2006～2008
課題番号：18330075
研究課題名（和文）18世紀イギリス都市における市民的社交圏の形成
—地域社会、消費文化、貧困—
研究課題名（英文）The Formation of Civic Sociability in the Eighteenth Century English Towns Local Communities, Consumption Culture and Poverty -
研究代表者
中野 忠（NAKANO, Tadashi）
早稲田大学・社会科学総合学院・教授
研究者番号：90090208

研究成果の概要：

消費文化や印刷文化の浸透を背景とする18世紀のイギリスの都市化は、人々の社会関係のあり方に新しい次元をもたらすとともに、古い制度や組織が担ってきた機能を新たな社会関係資本のネットワークのもとに再編する過程として進行した。都市社会はよりオープンになり、貧困や犯罪は中位層以上の市民が対処すべき社会問題となる一方で、社会的な差異を作り出す新たな力が作用し、参加型の地域社会もその性格を変えていった。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合 計
2006 年度	5,700,000	0	5,700,000
2007 年度	3,800,000	1,140,000	4,940,000
2008 年度	3,500,000	1,050,000	4,550,000
年度			
年度			
総 計	13,000,000	2,190,000	15,190,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：経済学・経済史

キーワード：都市化 消費 小売商業 地域社会 社交 貧困

1. 研究開始当初の背景

現代社会における問題関心にも支えられて、イギリス 18 世紀における「公共圏」や中位の階層の形成、消費革命などについての個別的研究は、欧米でもわが国でも充実してきている。しかしそれら諸論点を、この時代のイギリス都市化のユニークな過程のなかで、相互連関的に位置づけるような総合的試みはなされていなかった。

2. 研究の目的

「長期の 18 世紀」のイギリスにおける都市化とその歴史的意義を解明する。この時期の都市化には経済や人口の拡大という量的側面より、質的变化の点で注目すべきものがあった。都市化は社会を組み立てる原理そのものの転換が進行していく過程であったといえる。この過程を、「市民的社交圏」—ジェントリも含めた、都市を基盤に展開される新しい公式・非公式の社会的交渉関係—という概念を手がかりに、消費、小売商業、地域社会、貧困などの多面的視点から、実証的・総合的に明らかにしていく。

3. 研究の方法

(1) 多面的なアプローチを担保するために、研究代表者および分担者がそれぞれのテーマを分担して研究する個別研究と、(2) 本プロジェクト参加者全員が共同作業として行うセミナー、データベース構築などの研究の二つを同時並行で進めた。全体を通して、可能な限り、未刊行の手稿を含む一次資料に依拠すること、資料をデータベース化すること、数量的・統計的分析を試みること、という原則のもとに研究を進めた。

4. 研究成果

(1) 個別分担研究の成果

代表者および分担者による刊行済みまたは刊行準備中の個別研究は以下の通り。

ロンドンと社交圏の広がり：

中野は新しい社交圏の展開を促した重要な要素として馬車利用の拡大に注目した。それは従来考えられていたよりも早く、17 世紀半ばまでにはかなり普及していた。馬車は移動の頻度、早さ、範囲を大幅に改善する輸送手段として、ジェンダーや世代の差を超えて社交圏を空間的に広げただけでなく、ジェントリ層と広範な市民層を結ぶ社交のスタイルを生み出すことにも貢献したことが、農村ジェントリの世界と対比させつつ、ロンドン市

の記録や日記から解明された。中野はまた課税記録などに依拠して、17 世紀末までには「間借り」慣行が広く普及し、そのために地方の住人にもロンドンの社交生活や消費文化を享受する機会が担保されていたことを明らかにした。また中野は「市民的公共圏」の初期の舞台になったとされるコーヒーハウスについて、最近の研究成果を整理し、そこでの社交の形態や「公共圏」としての機能がもつ可能性と限界を指摘した。

消費文化、商業、社交空間：

道重と真保は、消費や商業が新しい社交生活の展開と密接に関連していたことを明らかにした。真保はロンドンにショールームをもつ家具メーカー、ギロウを取り上げ、その取引資料から顧客の社会的・地理的分布や、ショールームの果たした役割を検討した。顧客の大半はロンドンのウェストエンド周辺に住む富裕なエスクワイア層であり、ショールームは単なる陳列のためのものではなく、コミュニケーションの場としても機能していた。またギロウが顧客に提供したのは、家具だけでなく、住宅に関わる様々なサービスだった。消費革命のリーダーといえるエリート階級にとって、消費やショッピングは、単なる経済行動を超えた対話と社会的交渉の機会でもあったことを立証した。

道重は、上流よりもむしろ中流階層を顧客とし、18 世紀後半ロンドン西部の新興商業地区で営業をおこなっていた衣料品小物商を取り上げ、その経営分析を通じて小売商から提供される商品やサービスの性格あるいは顧客層の特徴などを検討した。この小売商は帽子や服飾品などの商品を販売する一方で、それらの洗濯・修理などのサービスをも提供していた。店舗においてはボライトな雰囲気を持維持するため、その外観や周辺環境に注意を払いつつ、また内部には顧客を接待する空間を設定するなど、顧客との、また顧客同士の積極的な交流の場を構築しようとしていた。こうした営業活動を通じてこの小売商は、単に商品を販売するだけでなく、顧客との交渉を通じて、この社会層にふさわしい、上層エリート層とは異なる独自の、しかしファッショナブルな商品やサービスの提供をおこない、都市の消費空間を媒介とする社会的交流の場を形成したのである。

地方都市、法人、社会資本：

新しい社交世界の展開は、ロンドンだけの現象ではなかった。唐澤はノリッジを対象に、

特にその都市法人の構成員の社会関係のあり方について、中世以来の共同体的組織の変容と解体、都市における社会資本の整備のあり方、およびそれを支える社会関係資本の性格といった観点から検討した。まず中世に起源し、1732年まで存続した聖ジョージ・カンパニーについて考察した。この組織は、市長就任式の運営に関わる負担を都市共同体構成員の義務とみなし、市民からその担い手を広く集めていき、宴会などを通じて都市共同体の階層的秩序の維持・集団的アイデンティティの確認を図ろうとした。だが17世紀末以降、入会の忌避と役職就任の忌避が見られ、最終的には廃止された。次に、主として収入役会計簿の分析を通じて、都市における社会資本の整備について検討した。この記録から都市法人の所有する資産の実態などが明らかとなり、それが都市の基盤整備にとって重要な財政的基礎となったこと、資産の運用が都市法人の構成員間の社会的な信用関係に支えられていたことが解明された。さらに、近年、中間団体に関する再検討が進められていることを踏まえ、ギルド制度をめぐる論争を中心に、工業化前ヨーロッパの社会関係資本に関する最近の研究動向の一端を整理した。

小西は18世紀から19世紀のキングス・リンを対象に研究を進めた。まずこの中規模都市の「都市ルネサンス」を指導したエリート市民とその活動を、市会、改良委員会、任意団体などの分析を通じて解明するとともに、都市改革法の時代に至るまでの長期の18世紀を通じて、この都市の統治が比較的連続的で安定していたことを立証した。さらにこの時代の救貧税記録を用いて都市の階層構造を統計的に把握し、それを都市行政の担い手に関するデータとリンクすることによって、この都市の統治が広い住民層の地位に応じた参加によって成り立っていたことを明らかにした。小西はまた地方都市とジェントリ関係にも注目し、キングス・リンから10マイル先の農村ジェントリ、アンソニー・ハモンドの手稿日記を転写・分析し、彼がコンタクトをとった人たちの名前や住んでいる場所、訪問した町や訪問の用件などを通じてその社交圏を解明した。彼は中規模都市キングス・リンだけでなく、近隣の小都市スワハム、25マイル先の州都ノリッジ、さらに首都ロンドンと、都市の階層的なネットワークをもっており、それらを利用目的に応じて使

い分けをしていた。しかしこの日記は、アンソニー・ハモンドの最大の関心事が土地経営にあり、ジェントリにとっての都市の存在を強調しすぎるのは問題であることも示している。

都市の地域社会と貧困、犯罪：

都市化、消費社会化や新しい社交の展開は、地域社会の内部では貧困や犯罪の問題と隣合わせで進んだ。菅原と中野は、ファッションブルな都市文化の拠点としても急成長をとげつつあったウェストミンスター市を事例に、これらの問題を論じた。菅原は近世都市に関する救貧行政と政治参加をめぐる歴史学界の議論を踏まえながら、1730年代までの地域社会としての実態を、コート・オブ・バージェズの議事録を主要な資料とし、教区の救貧記録などでこれを補いつつ、分析した。論点の一つは、地域社会と国家の関係にある。イングランド国家が在地の有力者の協力に依存する「権力のネットワーク」から成り立っていたとする近年の研究動向からすると、都市共同体やその下位の小共同体における役職の保有のあり方は、国家の性格を理解する鍵である。菅原は救貧行政や治安維持制度における役職分担やそれをめぐる紛争の分析を通じて、地域社会の参加の性格がしだいに変質し、国会議員の選挙権をもつ「地方税」納入者の「デモクラシー（P. Corfield教授のいう「プロト・デモクラシー」）」を基盤とする社会が形成されていく過程にあったことを論じた。

同じくウェストミンスターの18世紀の貧民尋問書を分析した中野は、1000人ほどの貧民の証言をもとに、社会の下層の人々の家族、結婚、職業、移動、社会関係などについて検討を加えた。一般にこれらの人々の移動性は高く、家族関係も不安定で、再婚や重婚さえもめずらしくなかったが、同じ地域に長年にわたって定着したと思われるものも無視しえない数いた。また彼らにとっても、親族や隣人との社会関係が重要な役割を果たしていたことを立証した。

都市化や消費文化の進展は、犯罪の頻度や性質にも変化をもたらした。山本はこの問題を検討するために、スタッフォードシャー文書館に手稿資料として所蔵されている四季裁判所記録（1777～1860年まで現存）のデータベース化に取り組んできた。1840年までのデータの転写は完了したが、1850年頃になると、犯罪者の識字能力や年齢、職業などについて

の調査なども掲載されるようになる。これらには、犯罪そのものだけでなく、広い意味での生活水準全般について考察できるような情報が多数含まれている。山本は当初の計画に若干の修正を加え、犯罪をより広い経済的・人口学的脈絡のなかで解釈すべく、これらの史料を分析し、その結果を口頭報告してきた。

貧困や道徳的荒廃は新しい社交形態を基盤とした社会の側の新しい対応を生み出す。その一つが貧民の子弟の教育を目指した 18 世紀の慈善学校である。中野はその歴史的意義についても検討を加えた。慈善学校は基本的に貧民子弟を既存の位階秩序に組み入れることを目的とし、都市中位階層の任意団体の会費により経営される 18 世紀に特徴的な制度の一つだったが、限られた範囲ではあれ、下層の識字率を押し上げ、文字・印刷文化、引いては社交世界の底辺を広げることに貢献した。

(2) 共同作業による研究

商工人名録データベース：3 年間にわたり続けた The Universal British Directory 1793-1798 のデータベース化の基本作業を完了した。人名だけで 20 万件にも達する膨大なデータが蓄積されており、今後の 18 世紀研究に多大な貢献を果たすと期待できる。ただ部分的目的にはこのままでも利用可能だが、より汎用性の高いデータベースとするには、なお改良が必要とされる。

海外交流とセミナー：2007 年 5 月に 18 世紀都市史研究の第一人者である P. Corfield 教授を招聘し、2 週間にわたって早稲田大学、専修大学、東洋大学、北海道大学、東北大学でセミナーを開催した。その際の教授の「イギリスと近代？」と題する三つの講演は翻訳が完了しており、報告書として 2009 年 7 月に関係者に配布される予定である。

研究会その他：研究の進捗を報告し、相互に調整するために、3 度の合宿を含め、合計 7 回の研究会・報告会を開催した。また成果の一部をイギリスの学会で報告するため、研究分担者が渡英した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 11 件)

唐澤達之「都市会計簿からみたイングラ
ンド近世都市—ノリッジの収入役会計簿

(1727/8 年)の分析—」『産業研究』(査読無し) 第 44 巻第 2 号、20-37 頁、2009 年。

中野忠「寄留人、間借り人、下宿人—
近世ロンドンの住宅事情の一斑—」『早稲田
大学社会科学総合研究』9 巻 3 号(査読無し)
1-34 頁、2009 年 3 月。

真保晶子「ギロウ・ロンドン・ショール
ームの顧客、1844-46 年—地理的移動と家
具・住宅関係サービスの注文の関連性—」『比
較都市史研究』27 巻 2 号(査読有り) 69-80
頁、2008 年。

Shimbo, Akiko, Life, Death, and
Furniture-Makers: Services for London
Houses, c.1810-50 The London Journal :
A Review of Metropolitan Society Past and
Present, Vol.33, No.2, pp. 119-134, (査読
有り) July 2008.

中野忠「馬車と鹿肉—近世ロンドンにお
ける社交世界の展開」『早稲田大学社会科学
総合研究』9 巻 2 号(査読無し) 1-29 頁、
2008 年。

道重一郎「戦後歴史学と『大きな歴史像』
の可能性」『東洋大学人間科学総合研究所紀
要』9 号(査読無し) 31-46 頁、2008 年。

道重一郎「18 世紀ロンドンの小売商と消
費社会」『経営史学』43 巻 1 号、(査読有り)
3-28 頁、2008 年。

唐澤達之「近世ノリッジの聖ジョージ・
カンパニー」『高崎経済大学経済論集』50 巻
3・4 合併号、(査読有り) 61-74 頁、2008 年。

小西恵美「18 世紀イギリス地方都市社会
の多元的構成—キングス・臨救貧税課税記録
の分析を中心に—」『専修大学人文科学研究
所月報』(査読無し) 234 号、25-55 頁、2008
年。

中野忠「王政復古期以後のロンドンにお
ける市民的社交圏—コーヒーハウスをめぐる
最近の研究から—」『早稲田社会科学総合
研究』7 巻 3 号(査読無し) 39-61 頁、2007
年。

道重一郎「18 世紀ロンドンの衣料品小物
商と破産手続き(完)」『経済論集』31 巻 2 号
(査読無し) 73-90 頁、2007 年。

山本千映「女性農業労働者の労働供給—
19 世紀イングランドにおける一農場の事例
—」『関西大学経済論集』(査読無し) 56 巻
2 号、1-79 頁、2006。

〔学会発表〕(計2件)

道重一郎「18世紀ロンドンの小売商と消費社会」経営史学会第42回全国大会(一橋大学)、2006年11月26日。

Michishige Ichiro, “The Shopkeeper and Consumer Society in 18th Century London” The Association of Business Historians(ABH) & The Centre for the History of Retail and Distribution (CHORD) Conference(University of Wolverhampton) 30th, June 2007.

〔図書〕(計4件)

中野忠(共著)『地域間の歴史世界：移動・衝突・融合』早稲田大学出版部、60-97頁、2008年。

Konishi, Emi (co-author), Who Ran the Cities? Ashgate: Aldershot, UK, pp. 3-20, 2007.

山本千映(共著)『近代統計制度の国際比較』日本経済評論社、141-177頁、2007年。

中野忠(共著)『教育の社会史』知泉書館、213-243頁、2006年。

6. 研究組織

(1)研究代表者

中野 忠 (Nakano Tadashi)
早稲田大学・社会科学総合学院・教授
研究者番号：90090208

(2)研究分担者

道重 一郎 (Michishige Ichiro)
東洋大学・経済学部・教授
研究者番号：40239273
菅原 秀二 (Sugawara Shuji)
札幌学院大学・人文学部・教授
研究者番号：40216297
唐澤 達之 (Karasawa Tastuyuki)
高崎経済大学・経済学部・教授
研究者番号：10295438
小西 恵美 (Konishi Emi)
専修大学・経済学部・准教授
研究者番号：90338583
山本 千映 (Yamamoto Chiaki)
関西大学・経済学部・准教授
研究者番号：10388415

(3)連携研究者

真保 晶子 (Shimbo Akiko)
明治学院大学・教養教育センター・非常勤講師